



ARABIAN NIGHTS

BY

ROBERT LOUIS STEVENSON

WITH INTRODUCTION AND NOTES

BY

Y. OKAKURA

PROFESSOR OF ENGLISH IN THE TOKYO HIGHER NORMAL SCHOOL

TOKYO

KENKYUSHA

1928



KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書



大正十年十一月 七 日印刷
昭和三年 五 月十七日印刷

大正十年十一月十日發 行
昭和三年 五 月廿日訂正三版發行

主 幹 者 岡 倉 由 三 郎

主 幹 者 市 河 三 喜

發行兼印刷者 小 酒 井 五 一 郎
東京市麴町區富士見町六丁目五番地

印 刷 所 研 究 社 印 刷 所
東京市牛込區神樂町一丁目二番地

發 行 所 研 究 社

東京市麴町區富士見町六丁目五番地
電話九段四〇二・四〇三番
振替口座東京二八六〇一番



非 賣 品



“The Harvard Pen.”

H. H. さま。——その後は如何お暮して御座いますか。またこの世にながらへてか、それとも、もう寂滅と云ふ人間の苦樂の外の靜かな境地に安住して、御座いますか。お別れまうしてから、もう足かけ二十年に成ります。私の留學の門出の前一日、明治三十五年の三月の或る日にお目にかゝつたのが最後で御座いました。何くれもなく御身の上をお案じ申上げながら長途の旅に上りまして、ヨーロッパのかしこゝに三年を夢と過し、歸朝して承れば、御境遇に重大な展開が生じて、同じ東京の、しかも近くに身を置きながら、昔の様に御伺ひをいたす自由を失ひ、それ以來の永い歲月と云ふものは、風のたよりに御様子を傳へ聞いて袂を濡すだけで、それより以上の何事をも爲し得ず、今日に及んだのは、義理の柵とは申せ、自分の腑甲斐なさがつくづく感ぜられます。

思ひ出せは古い事で御座いますが、初めてお目にかゝつたのは明治の二十一年の七月十六日のこと、箱根の本宿の御避暑先で御座いました。その以前數年來兄の口からは度々、兄の家に時々訪ねて見えて盛んに畫論に耽られた芳崖老人の口からもをりをりは、御噂を餘所ながら承つて、崇高な御人柄を敬ひ慕ふ念は、若い感じの強い心の底に次第に湧いて來たので、いつか一度御目ごほりがして見たいと存じてゐたので御座いましたが、その年來の念願が、はからずも自分が文科大学の片隅に身を置いた第一年満了の夏に叶つた、その時の私の胸が如何に躍つたかは、或は遂に御承知なくて終つたのかも知れません。

かくして親しく遂には殆ど毎日曜に御迷惑をも顧ず御館に参向していつも長時間文藝の事など何くれとなく御物語して過した、その間三年の歲月の中には、お心さお姿の言ひ知れぬ御氣高さ御美しさから、私がどの位、御氣付はあられませんでしたらうが、深く強い感化を受けたか、量り知れません。私は寔につまらぬ弱い人間で御座います。しかし若しその中に一つでも善い所があるとするは、それは主として御慈愛の賜として呼び醒されたもので御座います。あの頃私があなたにお目に係らなかつたとする、今日の私はどんな者に成つてゐたかわかりません。もつともつと心のすきんだ人間に成りさがつてゐたので御座いませう。

御側へ伺候してお話を受ける様に成つたまた初の頃まで存じますが、米國から御持ち歸りの、當時は學生の手までは容易に行きわたらなかつた萬年筆、御手づからの御賜物として一層ありがたく感じた黒軸金ペンの萬年筆、を賜はつた嬉しさは今もよく覚えてをります。上に金文字で“The Harvard Pen”と題したその革張りの小箱は數年前既に毀れてしまひました。そしてその軸そのものも、惜しいことに今は廢物として形を失つてをります。たゞその金のペン先だけは春風秋雨幾星霜の今日まで、御記念として大事に、朝夕打ち向ふ机の抽斗に納めて來ました。これを使ふ時はつい近頃まで稀にほかなかつたのです、その物がごうか成つてしまひはせぬかとの心づかひの爲に。しかしたまさか之を取出して何か書く場合は、何か心を込めた文を綴る時はかりと極めてゐるので、そのをりをりは、ベルリン大學の表立關係で、ふと求めた竹製の、たゞみ込みのペン軸、價は僅か二十ペニヒの安もので御座いますが、持ち馴れて親みの出來た三寸五分位の長さのペン軸、に添へることにしてをります。

私も今では數へ年五十四の老人で、兄より二つ齡だけは取り越しましたが追々身體が衰へて行きます。その全く衰へ切らぬ中に、

國家への最後の御奉公の一つと自分だけは考へて、この間から英文學の註釋書を出版する大事業の一端をおぼつかなくも、相かはらず謙劣な身に引受けまして、過去數ヶ月に亙り執筆やら校合やらに思ひの外の多忙な日を送つて居ります。その際、時々私の取り出しますものは、頂戴の例の大事の大事のペン先で御座います。これを手にするさ、あの思ひ出の豊かな昔が靄の様に机のめぐりに横ばいて、母の様な、否、姉の様な御慈愛が、こもすれば溢りがちの自分の詞藻を滑かに推し進めて下さる様な氣が致してなりません。この仕事の私の大任が、こもかくも茲まで無事にはかどつて來て、來月には、私の執筆したこの第一卷を露拂ひに、叢書が本邦の讀書界に出て行く様に運んだのも、専ら自身擔任の註釋を書く時使ふこのペン先に宿る御力添のおかけさ、私は正直に信じてをります。希はくは、その蔭からの御援助を得て、無事にこの大企劃を完うしたいもので御座います。

こんな、自分の胸だけに深く藏しておくべき事を、公にして、御迷惑の種となるかも知れません。思ひあまつて、つひ書いてしまいました。御免下されませ。それにつけても、今一度、出来るものなら、親しく御目通りしてあの時以來の御話を伺つたり、申しあげたり致したいもの。それは、もう、この世では望めないことなんでしょう御座いませうか。この世でなくは、そんならいつの世にで御座いませう。

大正十年十月十一日

岡倉由三郎

INTRODUCTION

I. 作者小傳

Robert Louis Stevenson は、1850 年十一月十三日に、Edinburgh の Howard Place の No. 8 で生れた。父は Thomas 祖父は Robert 二人とも功績あり名譽ある燈臺建築師 (Northern Lighthouse Engineer) であつた。母は Margaret Isabella と呼ばれ Dr. Lewis Balfour の娘であつた。だからその子即、我々が普通呼んで Robert Louis Stevenson としてゐる “New Arabian Nights” の作者の名は、正しくはその母方の名を貰うて、Robert Lewis Balfour Stevenson と書かれた。いづれにしても彼等の家は名家といふに差支のない家柄であつたのである。

さて其 Robert Lewis Balfour Stevenson 或は Robert Louis Stevenson それを略して R. L. S. と呼ばれた、將來の大文豪は、一人つ子であつた。そして極めて弱かつた。一家のものが手を盡して育てゝゐたうちに Alison Cunningham といふ乳母が、常に彼を抱きかゝへて守をした。Stevenson は (これから R. L. S. を只かう呼んですませよう)、彼女の事を “Cummie” と呼んださうである。その Cummie こそは、この病弱な子供を只いつくしみ守つたばかりでなく、彼を英吉利が持つた十九世紀最後の romanticist に育てあげた教師でもあつたのである。Cummie は Stevenson に様々の物語をした。Scotland に古くからある昔話をして聞かせた。咳をしてねられぬ夜の多かつた Stevenson の爲に添寝してゐては、遠くのごこかの家にも、やはり咳が出て眠られない子供があるでせうよ、さなご慰めて眠を誘つたこともあつた——それを Stevenson は覚えてゐた。かうした物語の興が、Stevenson に

romantic な文人的性情の芽を植ゑつけてゐたのたゞは誰が知つてゐたらう。

六歳の時、彼は Moses について一つの物語を作つた。そしてそれを母に筆記して貰つたを傳へられてゐる。八歳以後は自分で讀書する事を始めた。その年から學校へ通つた、學校はよく休んだ。身體が弱い爲であつた。そしてさういふ子供達がよくするやうに同級生の間で同覽雜誌など作つてゐたさうである。十一の歳(1861)には Edinburgh Academy へ、それが済むと十七の歳(1867)には Edinburgh University へ入つたが、十五歳にもなつた頃からは、その手慰みの文筆も漸く進んで來て、勉強もせず、學友もなく、遂に退學してしまふに至つた。二十二の歳(1872)であつた。

大學へ入つたのは父祖傳來の engineer になる爲であつたが、それは勿論彼に向かなかつたので、後には父の勧めによつて法律を學び、やがてその退學した年の冬には Scotch Bar の試験に通り、そこで狀師の受験準備をしてゐたが、二十五歳(1875)に至つて首尾よく及第し、狀師(barrister)になる事が出來或る法律事務所に入つた。然し、この狀師としての生活たるや誠に閑散としたもので、數箇月の間に依頼された件數漸く四、報酬は二けた(double figures)に達しなかつたこの事である。

然し二十三歳(1873)以後は實は専ら旅行に出てゐた。羸弱な身體の保養の爲であつた。佛蘭西にゐた事が多かつた。この佛蘭西の旅の間に、彼は一米婦人に會つて、熱摯火の如き思を寄せ、遂に二十九歳(1879)の八月七日には、その後を慕つて New York に渡航し、更に San Francisco に赴き、様々の困難と戰つて遂に其女を得たのであつた。この婦人は Fanny van de Grift と呼ばれ、すでに有夫の人であつたが、夫と離別しかけてゐたので、Stevenson は、その離別が法律上に認めらるゝまで待つてゐた。そしてその手續が済むと直ちに結婚したのであつた。1880年五月十九日であ

つた。此人は大へん物やさしい世話女房で、一に Stevenson の天才を伸すここに力を添へた内助の人であつたらしく、又別に文筆の才もあつた事は夫妻合著の小説にも現はれてゐる。連子が二人あつて、一人は男、も一人は女、男の方は Stevenson と後までも共にゐて、これも父子の合著を三種残してゐる。

この渡米及結婚は、不幸にして父 Thomas Stevenson の同意を得てしたものではなかつた。父はそれを許さなかつたのである。この事が甚しくその不興を買つた爲、彼は其後何等金銭上の補助をも生家から仰ぐ事が出来ず、その滞米中の生活は實に極度の苦しさであつたと言はれてゐる。彼の文人生活はこの故に始つたのであつた。而も彼の病弱は、いつまでも恢復しなかつたので、さりとて激しく働くことも出来ず、苦勞を重ねたのであつたが、幸ひ漸く彼の志も了解されて、結婚式のすぐ前に嬉しくも一年二百五十磅の補助を「當にしてよし」といふ父の電報を受取る事が出来たのであつた。

然し彼がそれまでの他郷に於ける苦勞は、彼の一生に忘れまじき悲痛な生活であつた。二等船客として米國に渡つた彼は一夜一志の安宿に泊らなければならなかつた。而も彼の索むる人は、更にこの大陸を横切つた San Francisco に病んでゐたのである。幸に彼が漸くその戀人の寓を探しあてた時、彼女は既に快くなつてゐたが、今度は彼自身が遂に斃れんかとする許りに衰へてゐたので、彼は又一人、この市の南百五十哩許りの山中 Angora の山羊牧場に移り住んで、その健康を養はねばならなかつたのである。

この時が彼の困窮の極點であつた。然し彼が當時友人に手紙を書いて、自分は今 Angora に近き市にある“California”紙の種取りとなつて、一週二弗の給料を貰つてゐると言つた事は、後人によつて彼の窮乏を語る一事實の如く考へられてゐるが、それは實は戯れの言ひ草に過ぎなかつた。それほどの事はなかつたであら

う。其年の十二月には又 San Francisco へ出て来て、“San Francisco Chronicle” 紙の通信員となつたが、種取りには出ても事實を報道する事以上に感想を誌して歸る事が多いので、それもやがて罷免される、貧困は益々募る、この四ヶ月又困窮缺乏に攻められて、或時は市の施療所で施薬を貰つたこともあり、職工づれと合宿して、一週六志の下宿で暮したこともあり、食べるものは、Joe's Coffee-house といふ、安つばい食べもの屋で、朝食夕食を五片、中食二志の *table-d'hôte* に限り、ある時は soup はかりですませたこともあるといふ程であつた。かうしてあるうちに漸く、本國の父から二百五十磅の手當が許される電報を受取つたのであるから、彼はさんなに喜んだことであつたらう。

この苦境にあつた彼を語つてゐるのは、“The Amateur Emigrant” と “Across the Plains” であつて、Scotland から America に渡る船旅の記、同船した移民などの様、米大陸横斷その他を書いたもの、今尙人の興じて讀むものである。

結婚後の彼等は、San Francisco の北五十哩の地 Silverado に一月の蜜月を送つて、その生活は「あぐら日記」(“The Silverado Squatters”) の材料になつたが、1880 年七月には、その妻と、その連れ子の Lloyd Osbourne をつれて米國を去り、八月十七日には故郷 Liverpool へ歸つた。兩親をはじめ、彼の一生の親友であつた Sidney Colvin も迎へに出てくれた。會つて見れば新妻と父母との折合は至極よくて、兩親は却つて非常に満足して彼等を遇したのであつたが、只さへ悪かつた彼の健康は、San Francisco の惡戰苦闘に益々悪くなつて、生命危きほざになり、同年十月には、冬越の目的で、瑞西國の Davos-Platz へ急いで轉地しなければならなかつた。彼はこゝの Hotel Belvedere に滞在して 1881 年四月まで、その身體——稍もすれば彼を斃さうとする肺を、養つてゐた。歸國してからも彼は轉々として旅行に暮した。六七の兩月は

Perthshire の Pitlochry にゐた。八九の兩月は Braemar にゐた。十月十八日になるさ又 Davos-Platz へ歸つて冬越をした。この年には “Am Stein” の名で記憶されてゐる田舎家風の別荘 (Châlet) を借りて住つて、又翌年の春までを保養に過したのであつた。

かの有名な “Treasure Island” が續き物として James Henderson 氏の經營にかゝる “Young Folks’ Paper” に載せられ始めたのは丁度この頃で即 1881 年であつた。

1882 年五月彼は Edinburgh に戻つた。夏の中には、近所の名所舊蹟を見て廻つてゐたが、十月になるさ又南方へ避寒して、今度は、佛蘭西の Marseilles から五哩許りの田舎へ家を借りたが、この時には又非常に身體が悪くなつた。1883 年三月には、同じ Marseilles の近くにある Hyères に別荘を求め、名けるに「閑寂莊」 (“La Solitude”) を以てし、こゝに靜養を怠らなかつたが、1884 年七月一日には又歸英、その後三年間は南英 Bournemouth に住んだ。始は貸間にゐたが、後 1885 年一月には、父親が、嫁 Fanny への贈物として、家を建てゝくれたので、そこに移り住み、其家をは “Skerryvore” と名けた。これは曾祖父 Alan Stevenson の建てた燈臺の名を借りて、その偉勳を記念する爲であつた。

1887 年五月八日父の Thomas Stevenson が死んだ。父がゐる間は、故郷にゐる必要もあつたが、今はその事もない。彼は妻子を連れて、米國の健康地に移つて行つた。生き残つた母も彼に従つた。かくて 1887 年八月廿一日英吉利を去つてしまつたのが彼の、生國英吉利、並びに歐羅巴に對する最後の別れであつた。九月七日 New York に着いた。十月三日 New York 洲の Adirondack Mountains 中の Saranac Lake 畔に家を得て一家そこに住つた。こゝには肺病療養所もあつて、空氣澄明なる健康地であつたのである。ここで彼は専心文學上の作品に力を入れ “The Master of Ballantrae” などが書き始められ、1888 年四月まで、此處に住んでゐたのであ

つたが、忠實な彼の妻は、その間に巡遊航海こそ病 Stevenson の爲に良いであらうといふ事を思ひつき、やがて San Francisco へ行つてヨットを買ひ込み、遂にその企を實行するに至つたのであつた。思へばこれが、彼の健康の爲の最後の企であつたさは誰が知らう。その船をは、“Casco” と名け、いよいよ航海の許可も得て、諸設備も整ひ、先づ南洋の巡航にまて、Marquesas Islands を目當として、乗り出したのは 1888 年六月廿八日で、遂に金門灣を立出でたのが、米國との最後の別れであつた。

その後三年は太平洋を自由に縦横に航海し、ある時は Hawaii Islands に居り、ある時は Gilbert Islands に住み、或は Samoa 島に立寄りなごしてゐたが、この間に彼は太平洋東部中部の諸群島を大體歴訪して仕舞つたさうである。“In the South Seas” は即この頃の収穫である。後彼は前の船を “Equator” といふ船に買ひ代へて、尙もその巡遊を止めなかつたが、この間に、日本に渡る氣もあつたと言はれてゐる。

一體 Stevenson は嘗て San Francisco に居た間に、日本人正木泰造といふ人から吉田松陰の事を聞いて、松陰傳を書いてゐる位で、而も、“I think it (松陰の名) should become a household word like that of Garibaldi or John Brown” と言つてゐる程であるから、日本には可成りの親しみを持つてゐたに違ひないのである。Lafcadio Hearn もこの松陰傳なごから日本へ來て見たくなつたのであらうかと思はれる。

1890 年に入ると、彼は一旦巡航を止めて、Samoa 島の Apia といふ町から二哩ほどの處に 300 acres の地を求め、そこに家を建てて、永住の計をなしたが、肺が又悪くなつたので、又航海に出て、その翌年から漸くその地に落着いた。ある人が何故 Samoa 島を選んだかと思つて來た手紙の返事に、彼は “I chose Samoa instead of Honolulu, for instance, for the simple and eminently satisfactory

reason that it is less civilized. Can you not conceive that it is awful fun?" と返事したといふ。

翌年 1891 年には、一大邸宅を造つて之を "Vailima" と名けた。その著 "Vailima Letters" の名はこれから来る。こゝで彼は全然航海を棄てた。五月になるこゝ、今迄共にゐた妻子の他に、母親も來たし、繼女で餘所に嫁いでゐる Mrs. Isobel Strong も來た。彼の生活は、さながらその近郷の太守の如く、酋長なども彼の門に出入して、土地の人から、いたく尊敬を受け、紛争などのある毎に口々をしてゐたさうで、story teller としての天分からは土地の人々から "tusitala" (物語る人) と呼ばれてゐたのであつた。

1894 年十二月三日朝のこゝ、彼は "Weir of Hermiston" を書いてゐたが、突然に死んでしまつた。

Samoa 島の Mt. Vaea に葬つた。墓の様子は Samoa 酋長のそれと同一で、石棺の様に作つた concrete 製の墓石が、大きな四角な石臺の上にのせられて居り、その兩面に青銅の板があつて、その一つには、Samoa 語で「物語りの君の墓」(The Tomb of 'Tusitala') とあり、その下には同じ Samoa 語で土人の經典が刻んである。他の一つには、彼自身の作になる鎮魂の賦が刻みつけられてある。

A		Ω
1850	ROBERT LOUIS STEVENSON	1894

Under the wide and starry sky,
Dig the grave and let me lie,
Glad did I live and gladly die,
And I laid me down with a will.

This be the verse you grave for me;
Here he lies where he longed to be:
Home is the sailor, home from sea,
And the hunter home from the hill.

II. Stevenson の心とその筆

人の生活は、その身心の發達に従つて、少年時代、青年時代、壯年時代などゝ、一々區劃をつけられるのが常であるが、更に立入つて考へて見ると、それは單なる年齡上の段取に過ぎないので、人の心持には、いつまでも少年時代のやうな感情精神を持ちつづけて行くのがあり、又た、少年の頃から、すでに老人の氣魄を備へてゐる人がある。

わが R. L. Stevenson の如きは前者に屬するので、一生少年時代の romantic な生涯を續けた人であつたとも言へよう。いはゞ大きな坊ちやん氣分の持主であつたのである。彼の作物全體を通じて見ても、又その書簡傳記等を見ても、又はその妻君が夫を評する言葉を聞いて見ても、この點は確かに間違ないやうに思ふ。この目で彼を見る事は、彼の文學並に生活を理解するに最もよき助けとなるものではあるまいか。

Stevenson には文體がある、文才がある。然し、古來幾多の文才文體家の間に交つて、尙彼を愛するものゝ數多いのは、つまり、この大きな坊ちやん氣分がある爲で、これが人に訴へる處が多いのではないかと思はれる。

彼は、名家の出で、氏も育ちも上品である。この事は我々にさつてはやさしい親しみの感じを與へるが、これは彼にさつても、一生如何にも上品な率直な心持を持ちつづけさせた一つの原因でなくてはならない。彼が一生不治の病を抱いて、藥餌に親しみ、普通人ならば、怨嗟の聲を漏すべき處をも、只唯々として、運命に随ひ、不平悲觀の語もなく、文藝の世界に悠遊したことは、つまり、この名家に生れて、世を果敢なむこさを教へられなかつたせいであらうが、これも亦、他面から考へれば矢張り一種の坊ちやんの人生觀であつたと言ふことが出來よう。

子供が病氣の時には、玩具に没頭してその苦を忘れるやうに、子供にはすべてに没頭し得る天分がある。物を報酬によつて計量しない。それ自身に價值を認めてこれに心を傾注する。これをも坊ちゃん氣分といへるならば、Stevenson が人生に對してこつた態度も正にこれではなかつたか。彼が衣食の爲に文筆を取つた時にすらもなほこの性向を捨てなかつたことは、彼の傳を読むものゝよく知る所である。

ある人は、Stevenson の作品に深刻味が足りないといふ。が、これは「深刻味」といふ意味のさり方もある他に、人生を悲痛の眼で見えてゐなければ、深刻たゞ考へない人もある故であつて、かゝる人には Stevenson は、或は恬淡に過ぎるかも知れない。然し、人間の性向とその表現は、單にかゝる一方からのみ見て評さるべきものではないので、わが Stevenson を見る目は、先づ前述の如き、物に拘はらぬ、清興と冒險を好む子供の心から見始めなければならぬかと思ふ。

彼のこの性情は、彼の日常の生活にも現れ、我儘を通して家の宗教を信じなかつたこと、家業を繼がなかつたこと、それ許りが一度なつた狀師をすら止めて文人生活に入つたこと、人の妻の籍にあるものを戀して、遂に米國までも之を追うて行つたこと、而して、その米國の西の端 San Francisco で病と貧とに悩んでゐても更に怨嗟の聲を出さない處にも、彼特有の氣分を見る事が出来るのである。——それをある人は、Stevenson の困窮は極短い間で而も眞實に苦勞を「重ねた」とは言へぬのであるからと論難する者もあるが、病を抱いてゐてさへ既に十分悲痛の思ひはあるに、平然として死に面し、最上の innocence を以て筆を執り苦惱の痕を一つも見せないのは、矢張り彼の性情人生觀の恬淡な爲たゞ考へるが至當であらう。“New Arabian Nights”のうちに一二ヶ所、死はそんなに怖いものではない、一旦心が決れば、いづれの道を

を取つても同じである、と言つてゐるのは、正にその表れの一つと見るべきではないか。

Stevenson は十九世紀最後の romanticist で romanticism 最後の驍將の如くに言ひふらすのが、今の文藝史家の通常であるが、彼は決して romanticism といふが如き主義を振りかざしてゐたわけではなくて、只彼の temperament のありのまゝの表れが、たまたま romantic stories となつたまである事は、それにつけても切に感じられる點である。

Stevenson の社會觀人生觀には、democratic な處があつて、一體に博愛善美の心が深かつた様である。

ある時その友人が病にして貧、困窮してゐるのを見兼て、自分の小遣をはすつかりその人に分ち與へ、自分は粗衣粗食して更に意に介しない、その風貌が餘り亂暴なので、他人から吝嗇だと言はれたといふ程の事さへあつた位である。而もその友人は、虛無主義にかぶれてゐたのであつたが、Stevenson は、世の中を平等にしてゆく事には賛成であるけれども、その手始としてこれを毀すことには賛成しなかつたので、虛無黨に同情をしてゐても之に加はらうとはしなかつたといふ。

又例へば、ある時、露西亞の虛無黨のものが、逮へられて牢獄へ入つた事があり、それを釋放して貰ひ度いといふ哀訴の書を出す企があつた時の如き、Stevenson もその連名の署名に加はつて欲しいといふ頼みを受けたが、彼はその罰の原因を聞いて、それが dynamite を投げて、傍にゐた労働者達を傷害した事にある由を知るや、かゝる罪は、正しき罪に非ざる故、釋放の理由なしとして之を肯じなかつたといふ話もある。

又彼は自分が、名家に生れ、何不自由なき生活をしてゐるので、それが自己の democratic な理想から苦しみの種になつてゐた様

子で、大道藝人などには、深い同情を寄せて、“We are all in the same boat” など言ひながら、金品を與へたさいふ傳へもある。だから、好んで美服を着るさか、奇風を好んださかいふ話もあるけれど、平常は極質素にしてゐた人なのである。

彼の宗教は、十六七歳頃までは、長老教會 (Presbyterian) の宗教を信心してゐたが、後には agnostic になつて、神をは sentiment として信ずる様になり、寺に行くやうな事をは律儀には守らず、家風にも背いてゐたのであるが、晩年死ぬ前などには、昔風な信念を持たうとして、古い宗教書など讀んだ様である。老境に近づいて自ら宗教氣分に入つたとも言へようか。“A Christmas Sermon”——“Across the Plains” の中にあるもの——は、その頃の筆である。

彼の婦人觀は 吾人の 知りたきものゝ一つである。何となれば、彼の作中婦人が主人公になつてゐるものは一つもなく、常にあつさりさ取扱つてあるのが、他の作家に比して甚だ異色であるからである。例へば “New Arabian Nights” 中にも “Suicide Club” には失戀があり、“Rajah’s Diamond” には Lady Vandeleur さいふものがあるけれども、一も戀愛の主人公ではない。然るに作者たる Stevenson 自身は親に背いて迄もその戀を遂げた人であるのは、誠に正反對大矛盾の様に考へられるが、そこに Stevenson の一面目が隠れてゐるのではなからうか。

彼は強い深い愛を抱く人である。又戀愛に對しては眞面目な考を持つてゐる人である。もしその戀を筆に寫すとしたらば、彼は必ずや、「ゑそらごさ」の思がして、濫りに筆を曲げるの恨があり、打込んだ心の熱撃をは、筆のすさびに書きなぐる心持がして、その良心の眞實に逆ふ感が深かつたのではあるまいか。“Virginibus Puerisque” の “On Falling in Love” 中に、戀は眞剣である、だから腹癒せに他の女を取るなさいふ事が出来るものではない、さいふ趣旨を述べてゐるのを見ても、一口に言へはこの戀愛さいふ眞